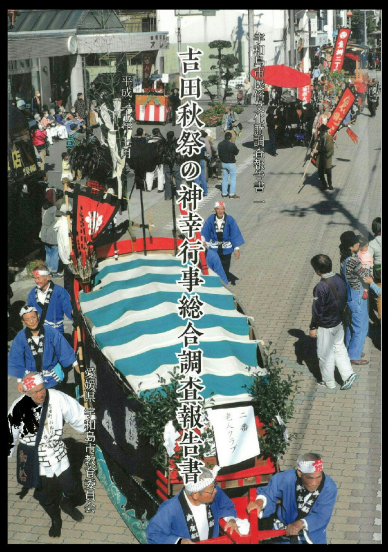
吉田秋祭展

ホタ（宝多）

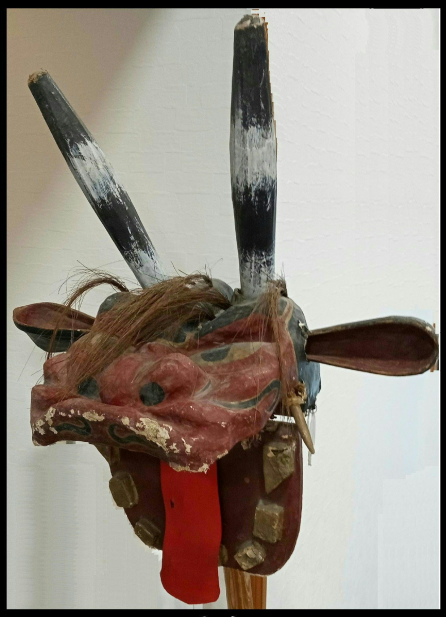
特別展示

「吉田祭礼絵巻」の全巻展示説明

とき：10月23日（日）
午前9時～午後4時



今回初めてとなる「祭礼屏風」の展示の他に、大正から昭和にかけての写真、所蔵する関係書籍等の展示を行っています。



牛鬼

場所：簡野道明記念吉田町図書館

期間：令和4年9月1日（木）～11月27日（日）

文久の地図に「お練り」を描いた『祭礼屏風』（186cm×76cm）

吉田秋祭

吉田秋祭は、宇和島市吉田町立間の八幡神社の11月3日秋季例大祭における神幸行事である。

近世後期に成立した祭例風流（ふりゅう）であるねり行列（おねり）の形態を幕末期に描かれた複数の絵巻物で確認できるとともに、近世祭礼の姿が江戸時代と変わらない町割りの中において江戸時代後期から継承されていること、南予地方の祭礼に登場するねり物の要素が広範に含まれて構成されることが特徴である。

贅を凝らした練車や立体刺繍の飾り幕は吉田町人の財力を物語る。練車の静的な運行に比べ牛鬼や神輿は躍動的であり演じることを見せる祭りもうかがえる。

吉田秋祭は、氏子に加え家中が参加するという典型的な大名祭りの形態をとりながらも氏子主体の祭礼組織及び形態が形成されたことにより今日まで継承される大きな要因になった。

写真は当館が所蔵する吉田秋祭を模写した高月紫明による絵巻の中の「牛鬼」。二巻からなり総延長はおよそ15メートルになる。御船、練車、猿田彦、鹿の子、牛鬼、宝多、四つ太鼓、御用練りなどが描かれいる。巻末に「昭和一五年（一九四〇年）　高月紫明謹寫　明治三五年　芝誠明謹寫」とあり写本であることがわかる。

ほた（宝多）

「ほた」について、「吉田町誌」は、頭は牛鬼に似ているが、弁柄特有のくすんだ赭顔（しゃがん）、角は真中にがっちりと一本、角をはさんで両耳が大きく両側に、特徴はその鼻、いわゆる見事な「ホタ鼻」が、太眉の下深くぎろりとむきでた両眼に陰をおとして、顔の中心にでーんとあぐらをかいている。ホタには、一般の獅子頭にみられるような定型はない。子どもがもつ小さなものから、三尺四方もある大きなやつまで、それぞれ作者はちがっても、無器量このうえもないそのホタ面には、どんな悪魔でさえも思わずしりごみするほどの不思議な鬼気を宿して、大きな角のあたりからたれさがる黒髪のみだれが、一段と凄みを加えている。下顎からは、寒冷紗の布地を長くたらし、これにはふつう、八幡大菩薩と大書したり、雲竜の墨絵などが描かれる。後頭部には半紙などをちょうど御幣を断つように細く長く切ったのをたばねて　一杯にとりつけ、さし上げたホタから地上にとどくほどで切りそろえる。ホタにでる者は、いずれも白装束にわらじがけ、腰には太い注連縄をはりまわす。宵宮の晩おそく、八幡様に参詣し、御神符をうけてこれを角の真うしろに貼りつけたのち、夜の明けるまで町中を練りあるくのであるが、往時はその数三、四百にものぼったといわれ、百鬼夜行の壮観はたとえようもないほどであった。と紹介している。